

たんけんたい ふるさと米子 探検隊



第24号 みの か や 箕蚊屋の歴史を知ろう

米子市立図書館 編刊 / 2022.3 TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637 <http://www.yonago-toshokan.jp>

みの か や 箕蚊屋について調べよう

米子を流れる日野川の東側には、箕蚊屋とよばれる地域が広がっています。平野には水田が広がり、雄大な大山を一望できるとても美しい地域です。箕蚊屋地域の北側には日吉津村、東側には淀江町や、伯仙小学校がある尾高地区があり、南側には伯耆町岸本が広がります。また、日野川をはさんだ西側には、車尾や五千石、宗像地区などがあります。この箕蚊屋一帯は、古代から多くの村があり、米子の中でも古い歴史をもつ地域です。日野川の恩恵をうけ、古くから稲作をはじめとする農業が盛んにおこなわれてきました。その一方で、日野川の洪水に長い間苦しめられ、箕蚊屋の村々は何度も水没したり、形を変えたりしてきました。今回の探検隊では、知られざる箕蚊屋の歴史や特色について調べてみましょう。



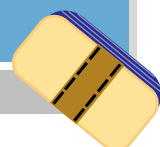
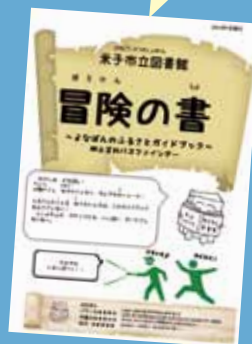
大山を望む箕蚊屋の田園

さんこうしりょう 探検隊の参考資料

今回の探検隊作成で参考にした資料です。図書館には、みんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。資料のくわしい紹介は、米子市立図書館郷土資料調べ案内「冒険の書」をご覧ください。

- 『鳥取県日野川の流路変遷に関する若干の考察』（岩佐武彦 2016）Y517イワ
- 『日野川下流域～過去といまを訪ねる』（建設省日野川工事事務所 1999）Y29/N17
- 『日野川河川事務所のあゆみ』（日野川河川事務所 2006）Y45/H4
- 『日野川今昔写真集』（立花書院 1999）Y74/Y10/青
- 『歴史の道調査報告書第六集 出雲街道法勝寺往来』（鳥取県教育委員会 1990）Y290/T24-2
- 『おはなし歴史風土記 鳥取県』（歴史教育者協議会/編 岩崎書店 1984）Y20/R3/緑
- 『米子市七十八周年史』（米子市 2019）Y224ヨナ/青
- 『鳥取県の地名 日本歴史地名大系42』（平凡社 1992）Y29/N19
- 『いわお故里の地名』（能登路定男 1979）092.24/N1-2
- 『記念誌ふる里』（いわおを語り継ぐ会 1997）Y224/I3/青
- 『郷土史 春日郷土史』（田中喬 1956）Y092.24/T1/青
- 『かすが春日公民館創立五〇周年記念誌』（春日公民館創立五〇周年記念誌実行委員会 2006）Y379/K7
- 『新修米子市史第五巻民俗編』（米子市史編さん協議会//編 米子市 2000）Y224/Y19/5

「冒険の書」は図書館HPからも
ご覧いただけます！



箕蚊屋の地名

箕蚊屋とは、日野川と佐陀川にはさまれた、「春日」と「巖」とよばれる2つの大きな地区を合わせた呼称です。南側にある春日地区には、水浜・東八幡・高島・古豊千（十日市・豊田）・下新印・上新印・赤井手・一部が、北側にある巖地区には、吉岡・熊党・浦津・蚊屋・今在家・二本木・流通町、という集落があります（4 p、5 p参照）。

箕蚊屋という呼び名は、いつからあったのかははっきりとわかっていません。かつて巖地区にあった「箕」（現在は二本木）と、今も残る「蚊屋」という地名が合わさって呼ばれるようになりました。この2つの地名は古くからあったことがわかっています。平安時代中期ごろ、日本最初の百科辞典といわれる『日本和名類聚抄』（通称：『和名抄』）がつけられました。この『和名抄』には、当時の日本全国にある各地の地名が掲載されていました。ここに「美濃（箕）郷」と「蚊屋郷」という地名が登場します。

米子とそのまわりは、かつては「会見郡」とよばれていました。『和名抄』には、会見郡内に日下・細見・美濃・蚊屋・安曇・巨勢・天万・千太・会見・星川・鴨部・半生とよばれる12の地域があったことが書かれています。このうち、美濃と蚊屋は現在の巖地区付近、千太は現在の春日地区付近にありました。そのほか、日下・安曇・巨勢・会見・半生といった8つもの地域が、今の箕蚊屋の近くにありました。なぜ、このように箕蚊屋周辺に古くから多くの人々が生活を営んできたのでしょうか。

箕蚊屋の地理

箕蚊屋は、広く平らな地形をしていて、箕蚊屋平野ともよばれています。この平野は、古代より日野川によって形成されてきました。現在、日野川は箕蚊屋の西側を流れていますが、かつては本流（大きな主流の流れ）といくつかの支流（本流から分かれた細い流れ）が、箕蚊屋地域の中を流れていました。古代の美濃（箕）は日野川の本流と支流にはさまれた地域だったといわれています。古代より人々が箕蚊屋周辺に住んでいたのは、日野川が近くにあることで、農業や生活のために、水がもとめやすい場所だったことが考えられます。せまい山の間をいきおいよく流れてきた川が、広い平野に出たとき、その流れが弱まり、運ばれてきた土砂が扇の形にたまっていく土地

のことを、「扇状地」とよびます。箕蚊屋平野はこの扇状地となっていて、長い年月をかけて川によって運ばれた土砂が積もってできた土地です（図1参照）。川の栄養をたくさんふくんだ箕蚊屋の大地は、田畑にも豊かな実りをもたらしました。住みやすい平らな地形と、日野川が育む土壌が、古くから人々の生活を支えてきたのかもしれない。



国土地理院「地図・空中写真サービス」を加工して掲載

緑の部分が日野川扇状地帯。箕蚊屋地域の大部分が扇状地です。



地理院地図（電子国土WEB）「日本の典型地形について中国地方」より

（図1）日野川扇状地

箕蚊屋と日野川の歴史

日野川は鳥取県三大河川の一つで、日野郡から米子を経て、日本海にそそぐ全長約 77 キロの大きな川です。人々に多くの



佐陀川（淀江町佐陀付近）



ホレコ川（古豊千付近）

恩恵をもたらしてきた日野川ですが、何度も洪水をおこす

あばれ川でもありました。洪水のたびに流れを変え、日野川下流にある箕蚊屋地域は何度も水没し、村が流されました。

かつて日野川の本流は、今よりずっと東の方にあり、戦国時代のころには、尾高から淀江町小波に向けて流れていました。今も流れる佐陀川がその跡です。天文 19(1550)年におこった洪水で、日野川の本流はさらに大きく西へ移動しました。

現在、下新印と古豊千の間を流れ、吉岡、日吉津付近を抜けて日本海へ流れる「ホレコ川」が、その流れの跡とい

われています。さらに元禄 15 (1702) 年におこった洪水で、日野川はさらに西へ移動し、それまで別々に海へそそいでいた日野川と法勝寺川が、現在のように合流して海へ流れるようになったと考えられています(図 2 参照)。しかし、現在の研究では、元禄 15 (1702) 年より前から、日野川と法勝寺川は合流していたのではないとも考えられています。いずれにせよ、川の流れを変えるほどの洪水が箕蚊屋では何度も起こっていたのです。

日野川下流の箕蚊屋地域は、大山から流れてくる土砂や、日野川上流で行われていた「たたら製鉄」で出る土砂が川底にたまりやすくなっていたため、今よりも川底がずっと高くなっていました。また、昔の堤防は今の堤防の半分くらいの高さしかなかったため、水はすぐにあふれてしまいました。江戸時代のころは、米子の城下町を守るため日野川左岸の整備はすすみましたが、右岸の箕蚊屋側は自然のまま、水の多くは箕蚊屋地域に流れこみました。台風や梅雨の時期のほか、春先の雪どけ水による洪水も多くおこり、長い間人々を苦しめました(洪水とのたたかひの歴史は探検隊 22 号にもくわしくのっているよ)。

下の手記は、昭和 20 年代前後に古豊千に住んでおられた方の、子ども時代の思い出です。今からほんの少し昔のことですが、雨で増水した日野川のおそろしさが伝わってきます。

(前略) 雨が三日も降りつづく川が鳴り始めました。初めは嵩を増した水が激しく瀬を下る音です。雲に反響してざわめいて家を覆い、夜も空が鳴っているように聞こえます。それからなおも雨が降りつづいて増水すると、川底を転がる石の地響きが、こんどは畳の下から伝わってくるのでした。小学校に上がるまえから、「眠っている間に堤防が切れて、大水が家押し流したらどうしよう」と心配で、この地響きが伝わってくるのがとても恐ろしく、なかなか寝つかれませんでした。(『つつじ読書会文集 第 23 号』所収「日野川」(石原亮氏/文) より抜粋)



日野川（日野川河川事務所付近）

(図 2) 日野川転流図



国土地理院地図を加工して掲載

箕蚊屋地域を探検しよう！

春日地区

水浜 日野川沿いにある集落で、地名も水辺にちなんでいます。日野川の洪水で何度も流された地域です。天文の洪水が起こってから、戦国末期ごろにできた集落といわれています。



八幡の渡し船 (昭和の初め)

東八幡 日野川をはさんだ対岸の八幡と、かつては同じ一つの村でしたが、天文の洪水で2つの村に分かれました。東八幡と呼ばれるようになったのは明治5 (1872) 年からで、それまでは馬場と呼ばれていました。この集落にある八幡神社の祭日に馬を走らせたことが由来とされています。集落の中は出雲街道が通り、参勤交代にも使われていました。街道筋には多くの宿屋があり、日野

川の川魚料理が有名でした。八幡と東八幡間の日野川には八幡橋がかかっていますが、昭和16 (1941) 年に木橋が完成するまでは渡し船があり、大山詣りのルートとして利用されていました。

高島 明治10 (1877) 年、高田、島田という村が合併してできた、古豊千の南側にある集落です。江戸時代には、大洪水によって住人がいなくなった時期もあったといわれています。村の名前は、かつてこの辺りが川や沼地であったときに、小高い島地だったことから、という由来があります。

古豊千 (豊田・十日市) 古豊千は、明治10 (1877) 年に古川村、豊田村、東千田村 (十日市) が合併してできた、日野川沿いにある集落です。今でも集落では豊田、十日市という呼び名が残っています。かつて戸上山の城下で四日市という村が現在米子市水道局の水道タンクがある



日野川土手から望む戸上山

一帯にあり、豊田と十日市はその村から派生しました。慶長 (1596 ~ 1615 年) の時代に戸上山城が廃城したため、四日市は現在の米子市内の場所に移りました。古川村は元禄15 (1702) 年の洪水によって日野川が西へ移動した後、その川の跡にできた村といわれています。古豊千には東八幡から続く出雲街道が通り、松江の殿様も参勤交代で通っていました。現在豊田公民館がある付近には、かつて「一里松」とよばれる松があり、街道の1里 (約4キロ) ごとの目安となっていました。

下新印・上新印・一部 この3つは「新印村」という村から分かれた集落です。かつて日野郡



ホレコ川の「ばんのきはし」
「番ノ木」が由来となっている

新印村 (今の伯耆町福兼) に慈光寺というお寺があり、そのお寺が寛政元 (1789) 年にこの場所に移ったことから、村の名前が新印村となった由来があります。元禄の洪水以前、下新印と古豊千の間にあった日野川 (現在のホレコ川) には、「番ノ木」とよばれる船着き場の目印があり、五千石との間に渡し船があったそうです。下新印にも「渡船場」といって、渡し船が発着する場所があったといわれています。上新印は下

新印より南東側にあり、かつてコボリジンナイという人が村を治めていたという伝承があります。上新印にある円福寺には、コボリジンナイのお墓があります。一部は上新印からさらに南東側にあり、戦国時代以降にできた集落といわれています。

赤井手 下新印の東側にある集落です。天文の洪水が起こる前、戦国時代のころまでは、このあたり一帯は日野川でした。江戸時代は「赤出」という地名が使われていました。地名由来の一説には、この地から赤目砂鉄が出たからでは、といわれています。

巖地区

浦津 熊党の南側にある集落で、明治10(1877)年、浦木村と津末村が合併して「浦津」となりました。浦木村ができたころは沼と藪が多い土地だったといわれています。浦木、津末という地名は、日野川の氾濫による地形や土壌が由来となっています。

熊党 浦津と吉岡の間にある集落です。かつて熊ノ藤五郎左工門という人が土着(この地に住み着くこと)したことが地名の由来となっています。熊党には江戸時代に竹松という住人がいました。享保17(1732)年、全国でウンカの大発生による飢饉がおこり、竹松は年貢額を下げない鳥取藩に対し、農民の先頭に立って稲に火をつけるなどの抵抗をしました。竹松は処刑されましたが、民衆のために命をかけて戦った義民として、長く語り継がれています。

吉岡 古豊千の北側にある集落で、西側に日野橋があり、対岸には車尾があります。日野橋ができる前は、吉岡と車尾の間に、伯耆街道・出雲街道の船の渡しがありました。もとは熊党村でしたが、嘉永6(1853)年に分かれ、安政6(1859)年に吉岡村となりました。地名の由来は村の成立に尽力した吉川氏と今岡氏の名前を、一字ずつ合わせて「吉岡」になったといわれています。

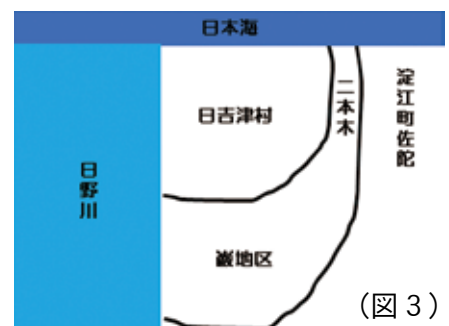


蚊屋 熊党の東にある集落です。集落内の両足院というお寺には、名和長年の母親のお墓があります。集落の中には大山道という街道が通っていました。かつては蚊屋村、上部村、絹屋村と分かれていて、蚊屋村は『倭名抄』にも登場する「蚊屋」の本拠地だったといわれています。上部村は春日の下新印村と同じ一帯の村だったのではと考えられています。絹屋村は、西伯郡にある絹屋(現南部町絹屋)から移住したことが由来とされています。



二本木 蚊屋の東側にある集落で、かつて観音堂境内にあった2本の大きな松が地名の由来といわれています。明治の初めに箕と合併しました。日野川の流れが変わる天文の時代以前は、日野川の本流と支流にはさまれた地域で、洪水の被害が多かったといわれています。

図3のように、二本木の集落は日吉津村のとなりに細長く続いています。細長い部分は、かつての日野川の支流の跡と考えられています。日野川の変化とともに、長い時間をかけて集落は形を変えてきました。集落内には「後池」という、日野川がかつて流れていたころの沼地の名前が残っています。



(図3)

今在家 今在家は、二本木の南側にある集落です。伯備線をはさんで東側には流通町があり、佐陀川が流れています。今在家という地名は鳥取県内に数カ所あり、地名の由来は新しく開拓した村という意味があります。洪水で荒廃した土地を人々が開拓したのではないかとされています。また、大山町今在家から移住したという説などもあります。

『いわお故里の地名』能登路 定男 著 参考

流通町 流通町は今在家の東側にあり、二本木、今在家、赤井手の3つの集落にまたがる団地でした。米子高速インターチェンジのすぐ側にあり、流通業務の拠点として、平成9(1997)年に米子流通団地整備事業が実施されると、この地に多くの企業が進出しました。平成10(1998)年に町名を一般公募して、平成11(1999)年に「流通町」となりました。

箕蚊屋MAP

- ⑤中島神社（蚊屋）
- ⑥二本木の辻堂（二本木）
- ⑨八幡神社（東八幡）
- ⑩水浜神社（水浜）
- ⑪東千太神社（十日市）
- ⑫一里松跡（豊田）
- ⑬泉龍寺（赤井手）
- ⑮円福寺（上新印）



①明治21年に架けられた日野橋の親柱



①旧日野橋



③大山道道標



④蚊屋 両足院 名和長年の母の墓



⑭箕蚊屋農民運動碑



⑦箕蚊屋土地改良竣工之碑



②吉岡 一石三十三観音像



⑧八幡の渡し（昭和の初め）



地理院地図

地理院地図（電子国土WEB）を加工して掲載

箕蚊屋の農業と農民運動

古代より稲作が盛んだった箕蚊屋では、田んぼに安定した水を送るため、江戸時代のはじめに日野川を水源とする「蚊屋井手」(井手:田の用水路)が開削されました。(蚊屋井手の歴史は「ふるさと米子探検隊第5号」をみてね)。明治時代のころは養蚕が盛んに行われ、箕蚊屋



では蚕を育てる桑畑もたくさんありました。特に古豊千の土壤は水田にあまり向かず、当時は桑園が多かったといわれています。このほか麦や大豆、甘藷(さつまいも)なども多く作られました。また、箕蚊屋では農耕や運搬作業のため、牛と馬も多く飼われていました。



箕蚊屋土地改良竣工之碑

農民運動と大山初太郎

農民の多くは小作農民といわれ、地主から土地を借りて農作物を作っていました。小作農民たちは、農地の使用料(小作料)として、農作物やお金を地主におさめなければならず、箕蚊屋では多くの農民たちが、重い小作料で家に畳も敷けないくらいの貧しい生活を送っていました。大正時代になると、全国各地で小作農民たちが団結し、地主に

大正14(1925)年 二本木の大山初太郎宅。日本農民組合山陰連合会本部でもあった。左が大山初太郎



大正13(1924)年 日本農民組合山陰連合会による第1回農民デーの行進の様子

米子で5月1日に行われるメーデー行進のはじまりといわれているよ



小作料を少なくすることや、農民の地位向上を訴える運動がさかんになってきました。米子の各町村でも大正7(1918)年~8(1919)年にかけて小作争議(地主と小作農民たちが意見を言い合って争うこと)がおこりました。箕蚊屋では、大正12(1923)年1月、巖村の大山初太郎という人が指導者となり、巖小作組合が結成されました。すばらしい才能と戦術で、初太郎は小作農民の地位向上に努めました。初太郎は日本農民組合山陰連合会の結成にも加わり、多くの小作人たちが運動に参加しました。

箕蚊屋事件

特に大きかった農民運動で、「箕蚊屋事件」とよばれる小作争議があります。これは争議が暴力事件に発展したもので、2度もおこりました。1度目は昭和2(1927)年、二本木で小作農民がつくる組合のおよそ1000人が地主側に対抗し、大乱闘がおこり、負傷者もでました。2度目は昭和7(1932)年におこり、警官隊と衝突しました。その後、地主側と小作農民たちの組合は和解しましたが、激しい箕蚊屋の農民運動は全国でも有名になりました。

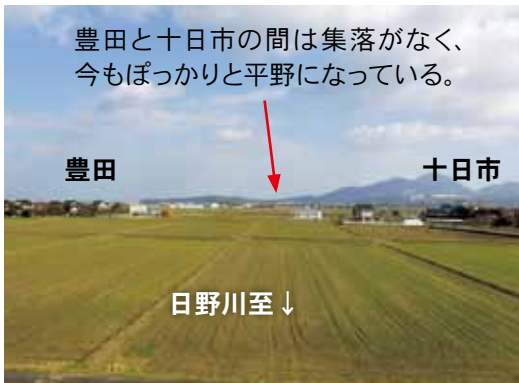
自作農創設運動

大山初太郎は小作農民を救うため、昭和8(1933)年、自作農創設運動をはじめます。自作農とは、土地を持たない小作ではなく、自分の土地を持つことができる農民のことです。大山初太郎の働きかけで、巖地区では多くの自作農民がうまれました。やがて第二次世界大戦後には日本の農地が解放され、農民たちのほとんどは自作農となりました。大山初太郎が率いる箕蚊屋の農民運動は、農業の歴史に大きな影響を与えたといえます。



箕蚊屋の民話

箕蚊屋地域にはたくさんの民話があるのでこっています。その中で、古豊千に伝わる民話を紹介します。みなさんもおうちの人や、近所の人に聞いてみましょう。



豊田と十日市の間は集落がなく、
今もぽっかりと平野になっている。

豊田

十日市

日野川至 ↓

古豊千の洪水と白蛇の伝説



とんと昔のことだけな。あーとき日野川が大洪水をおこして、古豊千の村は広い海のやになってしまった。だれんもが「どげした一えだーかなー」と困つと一と、一ぴきのがいな白蛇がやってきたとい。白蛇は村に流れ込んだ川の水を「ゴボリッ、ゴボリッ」とみーんな飲み干してごいて、そのまんま日野川へ去んでしまった。その白蛇が水を飲みなが一通つたあとが、豊田と十日市の間にはぽっかりと広い平野になって、今も残つと一ということだけな。

古豊千の松林の怪

とんと昔のことだけな。その頃の古豊千は松林ががいなことあっただつて。特に日野川のへりは殿さんが通一な一道だけん、暑いことねやによ一けこと松の木が植わつとった。そこは昼でも薄暗かつたし、夜一さに通一とタヌキやキツネが人を化かすといわれとった。あ一夜一さのこと、この松林を抜けて豊田にいなか（帰ろう）とした男がおつたとい。とこ一が、その男が夜通し歩いてても歩いてても松林か一出れんで、朝まで迷つとつたということがあつたげな。



むかし こっぱり。 再話協力：竹本厚子さん（ほうき民話の会）

箕蚊屋には、ほかにも二本木の「朝日さす長者屋敷」、
上新印の「金の鶏石」など、各地域にたくさんの民話があるよ。「ふるさと米子探検隊第1号 民話マップの巻」
でも紹介しと一けん、ぜひ読んでみてごしない!



もっと調べてみよう!

◎地形図を見て、箕蚊屋の地形の移り変わりや地形の様子を調べてみよう!

『鳥取県5万分の1 図歴地形図』(国土地理院発行)を見てみよう(米子市立図書館2階や、国土地理院のサイトで見れるよ)。明治32年から平成15年までの地形の変化や、等高線を調べることができるよ。

★日本の地形図や空中写真を見ることができるサイトだよ→国土地理院 <https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>

◎箕蚊屋のお寺や神社、道祖神を調べてみよう!

東八幡の八幡神社をはじめ、箕蚊屋の各地域には神社やお寺がたくさんあるよ。道祖神とは、集落に悪いものが入ってこないように、集落の境界や道に祀られた石像のことだよ。箕蚊屋にある道祖神を探してみよう。



古豊千 新田神社の道祖神

◎箕蚊屋の人物について調べてみよう!

今回紹介した大山初太郎や熊党の竹松惣六のほか、箕蚊屋出身の人物を調べてみよう。

◎日野川や橋について調べてみよう!

日野川のたたら製鉄や、日野橋、八幡橋の歴史を調べてみよう。